様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２５２６

研究課題名（和文）唐朝支配地域における基層社会構造の研究

研究課題名（英文）Research on the structure of the base layer of society in the areas controlled by the Tang dynasty

研究代表者
石野　智大（ISHINO, TOMOHIRO）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：００７７０９６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：唐朝の支配地域における基層社会がどのような人的構成を持ち、そこにいかなる構造が存在していたかを、当時の様々な出身や階層の人々をまとまって記録する石刻題記を中心的に用いて分析した。とくに、本研究では郷望層などの在地の人々の役割や位置づけに注目し、彼らと地方の官吏や雑任との関係性を解き明かしつつ検討を進めた。その結果、唐代の基層社会には、州県以下の地方行政制度や村落制度の基本的な枠組みと並行して、在地社会内部での多様な人的結合や非制度的な人的序列なども存在していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
唐代の基層社会の研究において、地方行政制度や村落制度の枠組み、運用形態に関する検討は早くより行われ、多くの知見が蓄積されてきた。しかしその一方で、上記の諸制度の背後にある在地社会の内面を明らかにする研究は、史料的な制約もあって、十分に進められていない。本研究では、従来当分野では利用されることの少ない石刻題記史料の収集と分析をもとに、唐代基層社会の内部構造に関する研究を進めた。本研究で用いた石刻題記分析の手法は、今後の新たな地方行政史・村落制度史研究を行う際にも有効なものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Using analysis of stone engraving records compiling the birthplace and class of various people of the time, this study considered the human structures of the base layers of society in the areas controlled by the Tang dynasty, as well as whether any kind of structure was present in these areas. This study was especially focused on the roles and positions of members of classes such as the Xiang wang (鄉望) and conducted investigations to clarify the relationship between them, local officials, and miscellaneous staff. The results showed that the base layer of society in the Tang dynasty consisted of sub-state local administration and village system frameworks which, for the most part, ran together. The analysis also identified various structures within the local society, such as human connections and non-institutional hierarchies.

研究分野：中国史

キーワード：唐代　領域支配　地方行政　村落制度　基層社会　碑刻史料　石刻題記

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

唐朝の領域支配の基礎となる地方行政制度や村落制度の研究は、20 世紀初頭より日唐律令比較研究の成果をもとに行われ、制度的な枠組みの解明を中心に進められてきた。また、それとも並行しつつ、1960 年代以降には新たに見出された敦煌・吐魯番出土の文書史料を用いて、地方行政や村落制度がいかに運用されていたかという点にも関心が向けられてきた。唐代の地方行政や村落制度の枠組みと運用形態の双方に着目する研究は、唐令の体系的な復原が中田薫や仁井田陞などの日本人研究者によって進められたことや、唐代の社会経済文書を多く含む大谷文書が日本に早く将来されていたこともあり、1990 年代まで日本の研究者を中心に行われてきた。その後の 2000 年代以降には、日本側の研究成果に触発される形で、中国の歴史学界でも当分野に注目が集まり、中堅・若手研究者を中心に多くの研究が発表されている。

さらに研究代表者は 2010 年以降、先行研究では見落とされてきた石刻史料の事例を現地調査も踏まえて取り込みつつ、唐代の地方行政制度や村落制度の研究を進めてきた。その過程において、石刻史料のなかでも、史料作製の発起人を記録する銘文やその作製に関わった人々を記録する題記が、基層社会の人々の姓名、官職名、血縁関係などをまとまって伝える貴重な記録であることを強く認識した。とくに、このような石刻題記は、地方行政組織の官人、村落組織の行政的な責任者、各種の雑任たち、村落社会の長老層や指導層、僧尼や仏教信徒、一般庶民層、書人や石工などの職人、「郷望」と呼ばれる在地有力者など、他史料には記録されにくい人々の記録を多く残しており、その人数は石刻題記ごとに数十人から数百人にのぼっている。

そのため、特定の時期、一定の地域に存在した人々の記録を大量に今に伝える石刻題記を用いることで、唐代の地方行政制度や村落制度のみならず、それらを含む基層社会の構造を分析できると考えるに至った。また本研究を計画した理由として、唐代の地方行政史や村落史の分野で石刻題記の事例を活用した研究が少なく、その検討も十分に行われていないことが挙げられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、石刻題記に残る多様な人々の情報を利用して、唐朝支配地域の基層社会がどのような人的構成からなり、そこにいかなる構造が存在したかを解明することにある。その具体的な検討においては、従来の研究で注目されてきた地方行政制度や村落制度下の官吏や雑任のみならず、郷望層をはじめとする在地の人々の役割や位置づけをも明確にし、両者の関係性を解き明かしつつ、唐代の基層社会の構造を提示することを目標とした。

３．研究の方法

本研究では、唐代の石刻題記を中心史料に据え、そこから基層社会の人々の情報を抽出して整理と分析を加えた。具体的には、(1) 本研究課題に関わる唐代石刻題記の収集と整理、(2) 唐代基層社会構造の解明に向けた個別研究の項目に沿って本研究課題を進めた。(1) では本研究の基礎となる事例の収集・整理を行いつつ、従来の唐代石刻題記を用いた研究の成果と課題を整理した。(2) では (1) の作業も踏まえて個別のテーマに関する研究を進め、とくに①地方行政制度や村落制度下の行政担当者や責任者、②その他の在地社会の代表者に注目しながら、基層社会の内部構造を読み解く作業を進めた。

４．研究成果

(1) 唐代石刻題記の収集と整理

唐代の石刻題記は、それを刻んだ碑刻や造像記の点数に比例して膨大な数にのぼるが、総合的な目録はいまだ作成されておらず、各テーマに応じた独自の史料調査が不可欠な状況にある。そのため、研究代表者はこれまで唐代の基層社会に関わる石刻史料の事例を継続的に収集してきたが、本研究では『石刻史料新編』、『全唐文補遺』、『全唐文補編』などの録文史料集と既刊の拓本史料集との対照を踏まえて、さらに広範に石刻題記の事例を収集した。それによって、本研究に関わる重要史料を複数見出すことができた。とくに、『続修四庫全書』史部・金石類所収の清代石刻書には、従来の研究では未注目の石刻題記の録文も複数収録されていたことが判明した。

その後、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター、北京大学図書館古籍分館、中国国家図書館善本特蔵閲覧室、廊坊博物館などにおいて史料調査を実施し、上記の事例収集時に見出した碑刻を含め、従来の研究で見落とされてきた唐代村落制度関連石刻史料の貴重な情報を入手した。これら関連石刻の発見は、今後の研究に繋がる成果である。

さらに、本研究の中心史料である唐代の石刻題記については、これまでの研究の成果と課題をまとめ、日本古代史・朝鮮古代史の研究者が参加する「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」研究会において「唐代石刻題記研究の概況と実践」と題する報告を行った。この研究整理によって、唐代史研究における石刻題記の有用性を改めて確認するとともに、既刊資料集（図版集、録文集）の不備や従来の録文を用いた研究の問題点を明らかにした。

(2) 唐代基層社会構造の解明に向けた個別研究

上記の (1) で収集・整理した石刻題記のデータをもとに、石刻題記に刻まれた人々の肩書を整理分類し、唐代の基層社会がいかなる人々によって構成されていたかを探った。そのうえで、①地方行政制度や村落制度下で行政的な役割を担った人々として、地方行政組織の胥吏層や村落制度下の行政的な責任者などを中心的に取り上げ、②その他の在地社会の代表者としては、史

料上で一般民衆とは区別されることの多い「郷望」の肩書を持つ人々に注目した。

①唐代基層社会の行政担当者に関する検討では、文献史料にわずかに記録が残る地方行政制度下の胥吏層の活動や、村落制度下の責任者たちの任用形態などについて分析を加え、彼らの特徴を明らかにした。当研究項目に関しては、史料的な制約もあって全体像の解明には至っていないが、その成果として「唐代県行政下“不良”的犯罪調査」（周東平・朱騰主編『法律史訳評』第六巻、中西書局、2018 年 11 月）、「唐代の里正・坊正・村正の任用規定とその内実」（『明大アジア史論集』第 23 号、2019 年 3 月）を発表し、今後の研究に繋がる基礎的な知見を提示した。

②その他の在地社会の代表者に関する検討では、主として「郷望」層に焦点を当てた。唐代の「郷望」に関する具体的な事例は石刻史料にしか残されておらず、これまで詳細な分析が加えられることも少なかった。しかし、現在把握する限りでも、唐代の碑刻や造像記には計 130 人以上もの「郷望」の事例を確認することができる。また、各史料が伝える基層社会内部の集団活動において、彼らが発起人となるなど、中心的な役割を担っていたことが窺える。そのため、本研究では基層社会における「郷望」の位置付けを明らかにし、あわせて彼らとその他の人々との関わりについても検討を進めた。その際には、同一地域において「郷望」の肩書を持つ者と持たない者がともに確認できる事例に着目し、その具体的な比較を通して両者の共通点と相違点を浮き彫りにした。当研究項目については、今後に論文化を進めて成果を公表する予定であるが、その一部は法史学研究会において「唐代玄宗期の郷望と村落社会―河北省本願寺旧蔵「金剛経碑」の復原をもとに―」と題して報告を行い、唐代郷望に関する最重要史料の分析結果を示した。

以上の①②の研究によって、唐代の基層社会では地方行政制度や村落制度の枠組みが基本軸として存在しながらも、一方では在地社会における多様な人的結合や郷望・郷民間の非制度的な序列なども並行して存在したことが明らかとなった。これまでの唐代史研究でも在地社会内部の秩序形成を取り上げた研究は少なく、今後の研究において一層追及すべき課題となろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 石野智大	４．巻 第23号〈寺内威太郎先生退休記念号〉
２．論文標題 唐代の里正・坊正・村正の任用規定とその内実―『通典』郷党条所引唐戸令逸文を手がかりとして―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『明大アジア史論集』	６．最初と最後の頁 129～147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石野智大（周東平・黄静訳）	４．巻 第六巻
２．論文標題 唐代県行政下“不良”的犯罪調査	５．発行年 2018年
３．雑誌名 周東平・朱騰主編『法律史訳評』	６．最初と最後の頁 153～168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 石野智大
２．発表標題 唐代玄宗期の郷望と村落社会―河北省本願寺旧蔵「金剛経碑」の復原をもとに―
３．学会等名 法史学研究会第200回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 石野智大
２．発表標題 唐代石刻題記研究の概況と実践
３．学会等名 「古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開」第3回研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 石野智大・渡邉光代編	４．発行年 2019年
２．出版社 明治大学ＥＬＭ	５．総ページ数 iii＋88p.
３．書名 明治大学ＥＬＭ（法・医・倫理の資料館）日中医史学関連資料目録	

１．著者名 石野智大	４．発行年 2018年
２．出版社 明治大学ＥＬＭ	５．総ページ数 ｉ＋139p
３．書名 明治大学ＥＬＭ（法・医・倫理の資料館）山崎佐旧蔵資料目録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考